

## 2020年6月豊能・三島ブロック例会実践報告 「かっとぼし野球」

田中宏樹（兵庫教育大学大学院）

### 【実践対象】

- ・関西学院初等部の1・2・4・5年生児童（1クラスあたり男子15人、女子15人）
- ・3学期に約5時間分実施した。＊急遽休校となったため、途中で実践終了。

### 【実践をするに至った背景】

体育専科として4年目のシーズンとなったが、2019年度は5年生と1年生の授業に苦勞する場面が多かった。

5年生は、低学年の頃から対人関係のトラブルが多く、非常に落ち着かない学年である。昨年度の4年生の時から、体育の授業を担当しているが、特にボールゲーム単元でトラブルになることが多く、勝敗に対して強く拘る児童が多数おり、ルールやマナーに反した行動をする児童を中心に、授業中に喧嘩になることが何度もあった。また、喧嘩になった際は手を出してしまうこともあり、5年生の2学期になってからは、各クラスに授業を見守る教員が配置されるようになった。しかし、体を動かすことが好きな児童が多く、体育の学習に対しては意欲を感じられるが、1学期にフラッグフットボールやキャッチバレーボール実践を行った際、グループ学習をした際の対人トラブルの多さに加え、メインのゲームが始まった際は、体育の学習として安全を確保できないような状況が生じたため、途中で断念せざるを得ないこともあった。専科制というシステム上、トラブルの事後指導や引き継ぎを担当の教員と行うことが難しいこともあり、授業中にトラブルをできるだけ起こさないことを考える必要性を感じていた。また、一部の児童は、単元の内容によっては学習に参加しなくなる場面もあった。例えば、なわとびの授業の際、一切跳ぼうせず、他の児童とふざけることがあった。その一方で、自分のやりたい活動に関しては積極的に参加し、その際、ルールやマナーを守らず、他の児童の参加を疎外してまで、自分ばかりの活動に没頭してしまうこともあった。そのような児童の実態からも、教材の選択が重要であり、「ルールやマナーを守ること」や「合意形成」に課題性を感じていた。

1年生は、全体的に落ち着かない児童が多いが、3クラスある内の1クラスに、特に特徴的な児童が多く在籍しており、1学期は特に、集団として授業を行うことに難しさがあった。学校生活にも慣れ、集団として少しずつ成長も見られてきたが、「ルールやマナーを守って、みんなが楽しく遊ぶ」ことに課題性を感じていた。

休み時間の児童を観察していると、グラウンドでは「手打ち野球」で遊んでいることが最も多い。少なくとも、各学年に1グループずつは、それを10数人以上で行っている。テレビや球場で野球観戦する児童が多く、課外クラブで野球をしている児童も多数存在する。初等部の体育の授業においては、学習指導要領の「ベースボール型のゲーム」にあたる内容として、例年、3学期にキックベースを実施することが多いが、バットを用いたゲームを行ったことはなく、度々、児童からも「バットを使った野球は体育ではないんですか？」と声があがることがあった。

私自身、バットを用いた「ベースボール型のゲーム」の実践がなく、以前からいつかやってみたいと考えていた。管理職や各学年の先生に許可を頂き、それでも学校に器具がない分、自分で道具を揃えることとなったが、藁にもすがる思いで実践してみることに決めた。

## 【かっ飛ばし野球とは】

### [道具]



幼児～小学1・2年生用



JTAケンコーティールボールバット



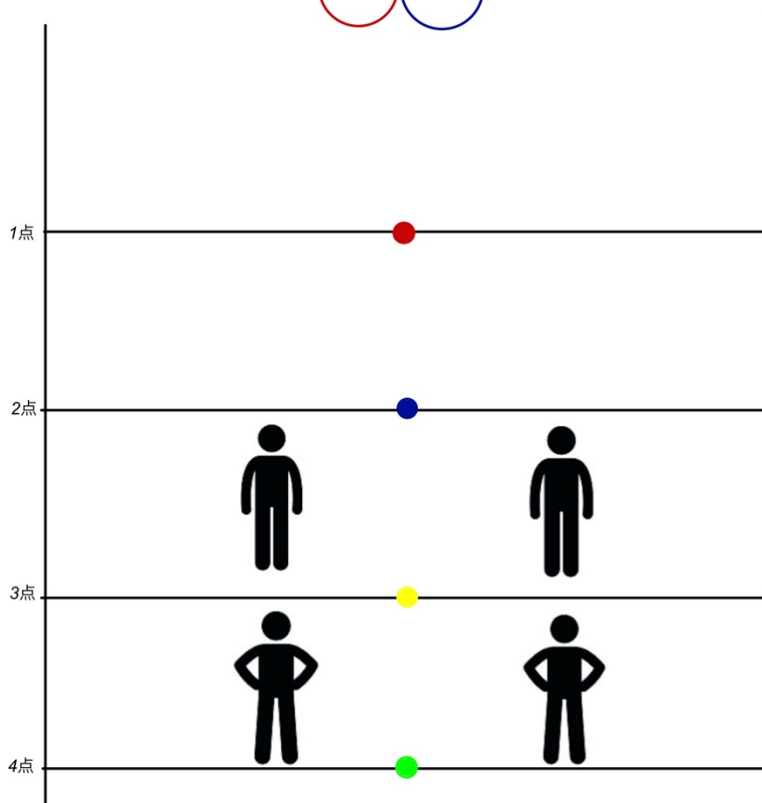
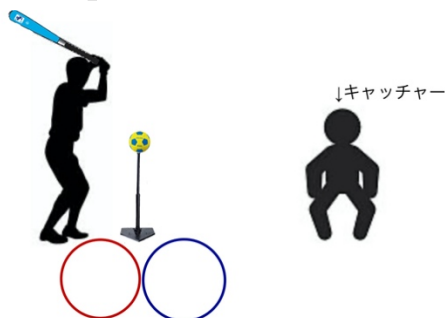
1800

ティールボール

素材：EVA  
円周：約50cm  
重量：約150g



### [基本的なゲームのルール]



・バッターはボールを打った後、バットを置いてすぐに走り、いずれかのマーカーを折り返し、片方のフラフープを踏む。

・打球は、ノーバウンドで守備にキャッチされてもアウトにならない。

・左右の縦線の間がヒットゾーン。それらの外はファールゾーン。

・一人一回バッティングをし、チームのメンバーが一巡したら、攻守交代。一巡したチームの合計点で競う。

・バットを投げてはいけない。

・バントは禁止。わざと弱く打つのもなし。ボールを遠くにかっ飛ばす。

・空振りやファールは打ち直し。

・守備はボールを取ったら、キャッチャーに返球する。

・キャッチャーはボールを捕ったら、片方のフラフープを踏む。

・走っているバッターが帰ってくるのが早い、守備のキャッチャーへの返球が早いかで、判定する。

・前進守備は禁止。

・守備はボールを取ったら、蹴らずに、投げなければならない。

**[学習内容]**

○「ボールを遠くにかっ飛ばすためのコツは何でしょうか？」



- ① ❶：バットをボールのどこに当てるのか確認する。立ち位置は、ボールの横よりも後方。
- ② ❷：前足を上げ、バットを体の後ろに引く（テイクバック）。
- ③ ❸：前足を着地し、スイングに力を加える。
- ④ ❹：斜め下からバットを出し、ボールの真ん中より下の方をインパクトする（下から上への軌道）。
- ⑤ ❺：ボールを打った後もスイングを止めない。
- ⑥ ❻：バットを最後まで振り切る。

○「どんな所にボールを打てば、点が取れるでしょうか？」



- ④ どころが空いているか確認する。②空いている所を狙って打つ。③打ったらすぐに走る。  
④打球と守備の様子を見て、何点を狙うか決める（打球判断）。⑤⑥守備の返球よりも早く走る。

○「守備の作戦を考えよう！」



↑守備の並び方を工夫できる。打者によって位置を変えることもできる。



←1人で投げても届かない時は「中継プレー」を使う。誰が何をするのか役割を決められると良い。

**【教材の魅力・利点】**

○「活動が楽しい」

・バットを思いっきり振り、ボールをかつ飛ばすことはとても爽快である。普段、活動に消極的な児童でも、積極的に参加する場面も多々あった。

○「活動の難易度が易しい」

・誰にも邪魔をされずに、止まっているボールを打つことができる。ボールの大きさを通常よりも大きくしたり、バットを軽くしたり、ボールの高さを変えられることで、よりやり易くなる。

○「活動の平等性を確保できる」

・必ず全員に順番が回ってくるため、チャンスが平等である。攻撃の回数も決まっているため、守備の回数が多くなってしまうこともない。

○「人数を調整し易いため、運動量が確保できる」

・人数を調整することで（1チーム5人位が良い）、待ち時間が減り、強度の高い運動場面が増える。

○「授業マネジメントがし易い」

・1人ずつ順番にバッティングをするため、ルールを明確に決められ、活動の観察もし易い。

○「得点の判定やルールで揉めることが予想できるため、ルールづくりの授業に繋げられ易い」

・あえてルールの曖昧なポイントを設けておくことで、意図してルールの合意形成場面を創出できる。

**[単元目標]**

- ① 全員がゲームを楽しめるように、みんなで決めたルールとマナーを守り、積極的に活動に参加することができる。(関心・意欲・態度)
- ② ボールを遠くに飛ばすことができるバッティングフォームのコツを考えることができる。(思考・判断)
- ③ 安定したバッティングフォームで、ボールを遠くにかつ飛ばすことができる。(技能)

**[指導計画(全8時間)]**

第1次 ボールをバットで遠くにかつとばそう！(3)

第2次 5対5のかつとばし野球(5) \*実際は1～2時間分で終了。

**[授業の実際の流れ]**

次	時	学習活動	ねらい
I	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・グループ発表</li> <li>・ティーバッティングの練習方法の説明</li> <li>・どうすればボールを遠くに飛ばせるのかを考えながら、ティーバッティングをする。その際、目標物を置き、視覚的にどこまで飛んだか分かるようにする。</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元を通しての目標を共有する。</li> <li>・グループの発表。</li> <li>・活動の方法を伝える。</li> <li>・子どもの実態把握。</li> <li>・ボールを遠くに飛ばすことができるバッティングフォームのコツを考える。(思考・判断)</li> </ul>
	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回考えた、ボールを遠くに飛ばすことができるバッティングフォームのコツを共有する。</li> <li>・ティーバッティングの練習</li> <li>・試しのゲームのルール説明</li> <li>・チーム内で試しのゲームを行う。</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを遠くに飛ばすことができるバッティングフォームのコツを考える。(思考・判断)</li> <li>・ゲームの基本的なルールを伝える。</li> </ul>
	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室にて、遠くにボールを飛ばせている子どものバッティングフォームの動画を見る。</li> <li>・ティーバッティングの練習</li> <li>・チーム内でゲームを行う。</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バッティングのコツを視覚的に認識させる。</li> <li>・安定したバッティングフォームで、ボールを遠くにかつ飛ばすことができる。(技能)</li> </ul>

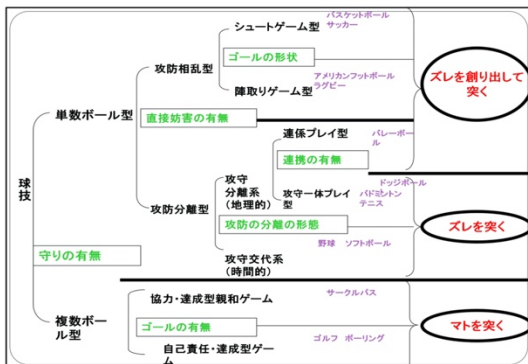
II	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バッティングフォームのコツを確認。</li> <li>・ティーバッティングの練習</li> <li>・5対5のかつとぼし野球のルール説明</li> <li>・5対5のかつとぼし野球</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安定したバッティングフォームで、ボールを遠くにかつ飛ばすことができる。(技能)</li> <li>・全員がゲームを楽しめるように、みんなで決めたルールとマナーを守り、積極的に活動に参加することができる。(関心・意欲・態度)</li> </ul>
	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の振り返り</li> </ul>	
	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ティーバッティングの練習</li> </ul>	
	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5対5のかつとぼし野球</li> <li>・振り返り</li> </ul>	

**[実践をした感想]**

2学期までボールゲーム教材において、体育の授業としてなかなか成立させられなかった5年生は、「かつとぼし野球」では意欲的に取り組めていたと感じている。普段、好き勝手我がままに振る舞う子ども、自分がやりたい活動であれば意欲的に参加し、やりたいという気持ちが強ければ、最低限のルールやマナーは守っていた。「教材の魅力・利点」にも記載したが、この実践が彼らにフィットした理由の一つに「授業マネジメント」がし易かったことがあると感じている。他のボールゲーム教材では、ゲーム中の様相に複雑さがあり、様々な場面でトラブルが多発した。そのような混沌とした状況下では、「活動の平等性の確保」は難しくなる。特に大人しい子どもにとって、その条件が崩れてしまうと、積極的な参加は見込めなくなる。その点、ベースボール型ゲーム教材は、バッティングという「個人としての活動時間」が確保されており、個人の成果を合わせた上での「協働」として活動が成立する。5年生の子ども達にとって、パーソナルな活動が確保された上で、他者と関わり合う活動が、現段階では適していたと感じた。

内容のシンプルさ故に、低学年においても実践が成立した。初めは、ボールを上手く飛ばせなくとも、バッティングフォームを改善することで、ほとんど全員の子どもの打球の飛距離が伸びたと思う。また、ゲームにおいても、得点のハードルが低く、クラスの全員が早い段階で得点することができた。そのため、普段体育活動に消極的な子どもも、積極的に参加する場面が多く見られた。

クラス全体の活動への参加度が高く、ゲームのルールがシンプルであると、「ルール・マナーづくり(合意形成)」の授業が進め易いと感じた。今回は実践として不完全燃焼で終了したが、またいつか、この教材を用いた実践にチャレンジしてみたいと思う。



←かつとぼし野球は、球技における「単数ボール型の攻防分離型の攻守交代系」に分類できる。この教材では空間の「ズレを突く」ことが学習内容の一つとなる。また、今回の教材では、フライボールをノーバウンドで守備にキャッチされてもアウトにならないルールを採用しているため、「ズレを突く」ことの難易度は、通常のベースボール系のゲームよりも易しいと言える。